

「柏崎の水」

西長鳥 長鳥鉱泉

長鳥鉱泉は「鼻田鉱泉」とも呼ばれ、西長鳥の鼻岳^{はなたけ}と岩の入の境界付近、かつての花田村に湧き出している。その歴史は古く、発見は今から約300年前で、湯の気と呼んで村人が利用していたと伝わる。当時の人がどのように使っていたかは不明だが、江戸時代に書かれた白川風土記には「花田ニアリ 至テヌルク 今浴スル人ナケレハ 其効験ヲシラスト云」とある。また年代は不明だが、御役所に届け出たと思しき文書が「北条町史資料」に記されている。

花田地内に冷泉が湧き出ているが、これまで放置されてきた。これを沸かし湯にして使いたいのでは、よろしく願いたい。冥加金^{みょうがきん}として五十文を納める。繁盛したら冥加金を増額する。

昭和8年発行の新潟県温泉誌は鼻田鉱泉を「四方山林を廻らす山間の浴場」と紹介している。また、同書には鉱泉旅館として「坂田館」の名がみえる。坂田館は明治のはじめ頃の創業で、お湯は火傷やおできなどに効能があると近郷に知られた。昭和20年代前半に旧家の屋敷を移築、昭和30年代中頃に建物の増築と風呂場の新築を行うと、鉄道を使って多くの人々がやってくるようになった。入浴客は、柏崎はもとより長岡方面からも訪れ、特に来迎寺や岩塚の人が多かったという。



長鳥鉱泉 坂田館 (写真は個人所有)

坂田館の仕事は、朝4時台の始発列車に乗って来る日帰り客の受け入れに始まり、浴槽の掃除や薪での風呂焚き、団体の接客や食事の用意などと深夜にまで及び、目の回るような忙しさであったとのことである。なお、大正から戦前までは鯨の一本煮が名物であり、食事に供されたほか土産としても好評であった。戦後は蕨やタケノコの味噌汁が名物で、それを目的に訪れる人もいたという。

しかし昭和40年代の信越本線複線化に伴う道路移設のため、坂田館は立ち退きを余儀なくされた。旅館の移転も検討されたが、鉱泉を遠くまで引くことができないなどの理由で断念、惜しまれつつ廃業となった。建物は取り壊され、跡地には柏崎・小国線の道路が通ったが、現在でも建物の一部のコンクリート基礎が残る。わずかではあるが鉱泉も湧き出し続けており、側溝部分には白い湯花を見ることができる。

坂田館の最盛期には最寄駅の長鳥駅も大いに賑わった。建物前には道沿いに数十本もの桜が植えられ、春ともなれば見事に咲きほころぶ桜並木を浴場から眺めることができた。それらは失われて久しいが、古きよき時代の懐かしい一場面として今も人々に記憶されているにちがいない。

参考にした本
「刈羽郡社会科資料集」刈羽郡社会科研究グループ編(375カリ)
「ふるさと北条ものがたり」北条南小学校編(224Kキタ)

